



ADL



ヘッドフォン
ADL
ADL-H118
¥23,100

●型式:ダイナミック・密閉型 ●振動板口径:40mm ●再生周波数帯域:20 ~ 20kHz ●インピーダンス:68 Ω ●感度:98dB/mW ●プラグ形状:3.5mm (標準フォン変換プラグ付) ●質量:245g (本体のみ) ●付属品:3.0m ストレート・コード、キャリングケース



ヘッドフォンケーブルは着脱式。3.0mのストレートコードが付属する

ADLから機能を凝縮したUSB DACと初の本格派ヘッドフォンが登場 甘美なテイストを持った三次元的な音を提示

Text = 中林直樹

ADLはオーディオケーブルやコネクタなどを手がけるフルテックのブランド。これまでヘッドフォンアンプやUSB DAC、ヘッドフォン用ケーブルなどをリリースしてきた。PCオーディオを始めとする、これからのリスニングスタイルにフィットする製品を、ハイクオリティかつ低価格で発売、と僕の目にはそう映っている。その印象をさらに強く、揺るぎないものにする製品が登場した。ハイレゾ対応小型D/Aコンバーター+ヘッドフォンアンプのX1と、ヘッドフォンADL-H118である。

X1はiPhoneを2台重ねたほどのコンパクトな体積。デジタル入力はUSB(タイプBミニ)、光を備える。さらにiDeviceポートも搭載し、iPhoneやiPadなどの端末からデジタルデータのまま入力できる。デジタルファイルはUSB、光ともに192kHz/24ビットまでの対応という、十分なスペックを誇る。また、天面のインジケータが、入力ファイルのサンプリングレートを知らせてくれる。

さらに、光デジタル出力も備え、D/Dコンバーターとしても活用できる。電源はUSBからのバスパワー、および充電も可能だ。そして、ヘッドフォン出力のインピーダンスは12 ~ 600 Ω。これなら大型のヘッドフォンでも余裕をもって鳴らせるはずだ。と、こんなふうにな々と列記したくなるほど、魅力的なフィーチャーが詰まっている。

H118は同社初となるヘッドフォン。これも紹介したい部分がたくさんある。まず、目を引くのがハウジングの形状だ。前方にややスラントし、立体的に成形されたそれは、音響効果とフィット感、密閉感を同時に追い求めた結果だ。それは「Alphaトリフォーム・イヤカップ」と命名された。ドライバーは特殊ポリマーフィルム製の振動板を採用。また、銅メッキを施したアルミ合金ワイヤーや高性能マグネット、ダンピングリングなどを用いることでチューニングを図っている。ケーブルは着脱可

ポータブルヘッドフォンアンプ

ADL X1

¥41,790

● USB 対応サンプリング周波数/ビットレート: ~ 192kHz / ~ 24 ビット ● 接続端子: デジタル入力 (i デバイス / USB [タイプ B ミニ])、ヘッドフォン出力 (3.5mm) ※ 光出力兼用 ● 寸法/質量: W68 x H16.5 x D118mm / 147g



デジタル入力はiデバイスおよびUSB [タイプBミニ]の2系統を備える



リケーブル iHP-35X が別売にて用意される (1.3m O.P.7 千円前後 / 3.0mm O.P.9 千円前後)。ミニプラグは非磁性ロジウムメッキ処理が施される



iPhone 4 までのスマホをデジタル接続できるケーブル id-30PS (O.P.4 千 5 百円前後 / 10cm)

能。つまり、リケーブルも楽しめるわけで、別売のフルテック製の iHP-35X を使用すれば、さらなるクオリティアップが期待できる。

では、MacBook Air と X1 とを USB でデジタル接続し、そのサウンドを H118 を使用して検証してみたい。まず、マイルス・デイヴィスの「イン・ア・サイレント・ウェイ」192kHz/24 ビットの FLAC ファイルである。デイヴ・ホルランドのベースと、トニー・ウィリアムスのドラムス (特にハイハット)、それにハービー・ハンコック、ジョー・ザヴィヌル、チック・コリアのキーボード、ジョン・マクラフリンのギターが時に絡み合い、時に拡散し、三次元的なサウンドを構築している。そこにマイルスのトランペットが切り込んでくる。その様子のスリリングなこと。それは、各楽器 (各帯域と言っても良いだろう) が、しっかりと鳴っているからだ。このレスポンスの高さは、ホセ・ジェイムズ「ノー・ビギニング・ノー・エンド」(48kHz/24

ビット FLAC) でも十分に感じられた。ベースやドラムスがひじょうにワイルドかつタイトに鳴り響く。ホセの歌声も深みと伸びやかさが両立している。特に『トラブル』での、クールだが、その体内に焔を宿したようなヴォーカルワークには、誰もが心を揺さぶられるに違いない。なんと甘美なサウンドだろう。ここでヘッドフォンのケーブルを前に記した iHP-35X に交換してみた。すると、サウンドの傾向はそのままに、ロー成分がさらに太くなったように感じた。逆に中高域はやや輪郭がくっきりとし、見通しが良くなっている。

今回は X1 と H118 との組合せで体感してみた。その相性の良さは既に触れた通りである。今度は両機それぞれ、異なるブランドのさまざまな製品と接続し、機会があればレポートしてみたいと思う。両モデルはそんなふうに本気で思わせるポテンシャルを有している。